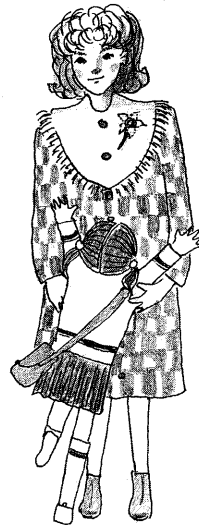


## 二歳児との出会い

守永 英子

ここ一年ばかり、二歳児との触れ合いの機会をもつようになった。二歳前後から三歳までの子どもたち十五人のグループである。週一回、一時間半ほどであり、同じ子どもたちとは、たった九回の触れ合いであるから、浅く短いものである。

長い間、幼稚園に在職していた関係で、三歳から就学前までの子どもたちとは、かなりなかかわりをもった。しかし、それ以前の、より幼い子どもたちが、どのような時期を過ごしてくるのか、かねてから、大変関心のあるところであった。僅かな触れ合いの機会であるが、幼い子どもたちは、いろいろな姿を、かい間見せてくれ、いっそうの関心をそそられている。



幼稚園の子どもたちにも、しばしば感じられたことであるが、幼い子どもたちの内にも、一個の人間としての誇りを守ろうとする断乎たる姿勢が、ひそんでいるように思われる。大人の一方的な押しつけをはねのけて、大人に屈せずに関心を守ろうとするこの力は、大人にとっては、しばしば「素直でない」「言うことをきかない」などと、マイナスに受けとめられやすいが、子どもを「一個の人間」として成長させていく、子どもの「内なる力」の一つの側面のようなものである。二歳児を見ると、このことが強く感じられる。

H子は、二歳四か月で、この二歳児グループに参加してきた。時どき、他の子どもにかみつくこと以外は、これといって、目立つ子どもではない。言葉による表現の、まだ少ない年齢の子どもたちであるから、たいたいたり、かみついたり、行動に訴えることは、よくあったけれど、H子のかみつく頻度は多かった。

グループ全員の子どもたちに、紙芝居を見せようとしたとき、三、四人の子どもたちが、席を立て、紙芝居のすぐ近くまできて、見ようとした。それぞれが、より近づこうとして、お互いに多少のけん制はあったものの、大きなトラブルにはならず、「よかった」と思った矢先、H子が隣の男の子にかみついた。そばにいた大人たちは、そのとき、誰も、H子がかみつくとは、予想できなかった。子どもたちのいざこざがおさまって、皆が紙芝居を見はじめた、と思える状況であった。何故H子は、かみついたのであろうか。H子のテリトリーをA男が侵したとでもいうのであろうか。幼い子どもの行動には、大人の理解しにくいものがある。

H子が、B男にかみつき、B男が、母親のところ泣いて行ったときも、あつという間の出来ごとであった。状況がよくのみこめないまま、泣いているB男と母親に対して、そして又、「かみついた」H子に対して、そばに居合せた大人としては、何もしないわけにはいかなかった。

「B男ちゃんに、「ごめんなさい」をしてきましようよ」と、H子に手をさしのべてみたが、H子は拒絶して、身を引いた。H子には、H子なりの、かみついた理由があるともいふかのようであった。

「でも、B男ちゃん、「痛い」って泣いているわ。「大丈夫？」って聞いてあげなければ」

今度は、思いがけず、H子の反応は素直であった。

自分が「ごめんなさい」といつて謝るのは、自分が悪かったと承認することであり、H子にとっては、受け入れられない。しかし、自分がかみついた相手が、母親に抱かれて、激しく泣いていることは気になる。といったH子の状況に、「大丈夫？」と聞いてあげようという提案は、うまく適合したのかもしれない。

H子は、自分から手をさしのべ、私と手をつないでB男に近づいた。

「痛かったですよ。大丈夫ですか？」と尋ねる私に、B男の母親は「もう大丈夫です」と答えてくれた。H子が、私と一緒にきて、B男の様子を気遣う素振りを見せてくれたことで、私もほっとし、H子に代わって、「痛かったですよ。かみついて、ごめんな

さいね」と詫びた。

すると、驚いたことに、続いて、H子が、「ごめんなさい」と、はっきりあやまったのである。

私が促したのではなく、H子の、自分から出た言葉であった。静かな感動が、胸の内にひろがり、H子へのいとじさが、こみあげてきた。

子どもの心の動きは微妙であり、大人の働きかけの僅かな違いで、気持ちの流れが変わる。大人の権威を強めることで、子どもに言うことをきかせるのではなく、大人が、子どもに対して、こうあってほしいと願う方向を、子どもの自然な気持ちの流れと、うまく擦り合わせる工夫が大切であろう。

二歳児をもつ母親は、子どもが、我を張って、言うことをきかなくなった、扱いにくくなった、と悩むことが、間々あるようであるが、このときをどのように過ごし、子どもにとって、どのような経験をするかが、次の時期の子どもの姿に、大きく影響を残していくことを思うとき、この時期に一層の興味を覚えるのである。

(元お茶の水女子大学附属幼稚園)